作文3部

農林水産大臣賞

水見半作～祖母と一緒に流した汗～

岩手県一関市立一関東中学校三年
千葉　心遥

七月のある日、母方祖母の家に泊まりにいくことになった。

「明日、ババんち行くからね。」

「心遥の好きな白ご飯炊いで待ってっから。」

スマホ越しの祖母の声はとても弾んでいる。祖母は泊まりに行くといつも炊きたてご飯と揚げたてアジフライを用意してくれる。私は弟とともにご飯とアジフライを頬張る。ご飯のフワッとした食感と、対照的なアジフライのサクッとした食感。甘みとうま味が口いっぱいに広がる。幸せなひと時だ。

「ババ、おかわり！」

弟と一緒に茶碗を祖母に差し出すと

「夜中に腹減って起きないようにいっぱい食えなあ。」

と、おかわりをよそってくれた。祖母の家で食べるご飯は、家や学校で食べるご飯よりも特別な味がする。

以前、祖母は祖父と力を合わせて、祖父母や私たち家族が食べるためのお米を作っていた。春にはハウスで種もみから苗を育て、二条植えの田植え機で田植えをする。夏には水見や草刈り、秋にはコンバインでお米を収穫する。そんな祖父母の姿を私はずっと見てきた。しかし四年前、祖父が突然倒れ亡くなり、二人でお米作りができなくなってしまった。それからは、農業法人にお米を作ってもらい、日々の水見や草刈り作業は祖母が行うようになった。

その日の日中、祖母と一緒に田んぼに水見に行った。祖母と一緒に長袖、長ズボン、長靴の格好で、手には「ホー」を持ち、田んぼに向かった。ギラギラした太陽が眩しく、こめかみから頬へ汗が流れた。祖母は田んぼに到着すると、沢の土のうを外し、ホーで水口から田に水が寄るように土を高く寄せていた。私も真似して土を寄せてみるが、思ったよりも田に水が入らない。その後、祖母は水尻に移動し、ホーで田の水が流れ出ないように土を移動させた。こんな暑い中、どうして面倒な水見をするのか、祖母に聞いてみた。

「おらほの田んぼは、食用米と品種の違う飼料米を作ってんだ。食う米よりもちょっと遅ぐ田んぼさ水引きしないと、稲の穂が出ないんだ。」

と教えてくれた。他にも、食用米と飼料米では田植えや収穫の時期、カメムシ防除の違いがあるそうだ。私は祖母の田んぼでは、食用米を作っていると思っていたのだが、家畜の餌になる飼料米を作っていると知り驚いた。さらに、私は人間が食べずに残した食用米が家畜の餌になるとばかり思っていた。しかし、飼料米にも食用米と同じように品種があり、農家さんが飼料米を丁寧に育てていることを祖母の姿から知ったのだ。

祖母が汗を流し育てた飼料米が、肉や卵、牛乳といった食材につながっている。食用米と飼料米、二つのお米が私たちの食を支えているのだ。祖母の作ったご飯が「特別な味」に感じたのは、祖母の愛情に加えて、食用米と飼料米の存在を祖母との水見を通じて学んだからかもしれない。農家さんの日々の水見の苦労があるからこそ、私は毎日三食しっかりと食べることができる。振り返れば眠くて朝食を残す時もあった。これからは祖母との会話を胸に、感謝して食事をしたい。

三ケ月後の十月、祖母の田んぼの飼料米は収穫の時期を迎える。稲に実が入り、稲穂が垂れてくる頃、田んぼは稲刈りに向けて、水尻から水を抜く落水という作業が必要だという。今度は祖母と落水作業の水見を一緒にやりたい。

「ババ、また来るからね。また田んぼ行こうね。」

車の窓から祖母に手を振った。祖母も笑って手を振っている。私は祖母の姿が見えなくなるまで手を振った。水見の作業で祖母と一緒に流した汗を思い出しながら……。